

21. 睡眠時無呼吸症に対する下顎挙上装置の開発と臨床応用

中山 宗, 荒木大介, 加藤治郎
渡辺俊英, 丹沢秀樹 (千大)
田中敦子, 磯野史朗, 西野 卓
(同・麻酔)

いままです睡眠時無呼吸症のDA療法による顎関節周囲の痛み、違和感、歯肉痛といった、副作用の訴えが多く聞かれ、これらの症状もDAの下顎挙上距離の増加に比例して多くなります。そこで今回我々が開発した下顎挙上装置は個々の患者に最適であろうと思われる下顎前方移動距離を全身麻酔下に見つけだし、呼吸状態の変化からこれらを予測することが可能かどうか検討しました。

22. まれな小唾液腺腫瘍の2例

金沢春幸, 古谷隆則 (君津中央)

極めてまれな口腔小唾液腺腫瘍の2例について症例報告を行った。症例1) 42歳女性, 口蓋部の腫瘤をとして受診した。左側口蓋後方に正常粘膜で被覆された直径8mmの半球状に膨隆した弾性軟の腫瘍を認めた。多形性腺腫の診断にて摘出手術を行った。病理診断: 形質細胞様筋上皮腫。症例2) 32歳女性, 左側頬粘膜下の直径10mmの無痛性腫瘤にて受診。小唾液腺由来腫瘍の臨床診断にて摘出手術を行った。病理診断: 好酸性腺腫。

23. 頬部に見られた多形性腺腫の1例

山本圭子, 奥村一彦, 山田哲也
江上史倫, 金澤正昭
(北海道医療大・歯・口外1)
大森一幸 (同・歯・口外2)

頬部小唾液腺から発生したと思われる多形成腺腫で、患者が自覚してから12年経過し処置された症例について報告した。患者は82歳の男性で、初診時、右頬粘膜部に鶏卵大の類円形の腫瘤を認め、触診で、弾性硬で圧痛のない、表面が凹凸結節状だった。全体として可動性であったが25×15mmの腫瘤状の粘膜は腫瘤と癒着していた。癒着部粘膜を含めて摘出術を施行した。病理組織学的検索により多形成腺腫と診断した。

24. 口唇多形性腺腫の2例

谷口勝哉, 吉野智晴, 高橋喜久雄
(船橋中央・歯口外)
近藤福雄, 大久保春男
(同・病理)

症例1: 患者24歳男性。主訴、左側上唇部の腫脹。左側上唇粘膜側に直径約25mmの腫瘤を認め、局麻下で生検をかね摘出術を施行。症例2: 患者29歳女性。主訴、左側上唇部の腫脹。左側上唇粘膜側に37×25mm大の腫瘤を認め、全麻下で摘出術施行。症例1, 2ともに病理組織診断で多形性腺腫を得た。発語機能や審美性を考慮すると、周囲との癒着を認められない場合、口唇での本腫瘍は摘出術が第1選択ではないかと考えられた。

25. Florid Progressive Transformation of Germinal Center と考えられたオトガイ下リンパ節腫脹例

高橋喜久雄, 谷口勝哉, 吉野智晴
(船橋中央・歯口外)
近藤福雄 (同・病理)

患者は16歳の男性で、約2ヶ月前に気づいたオトガイ下部の腫瘤を主訴に来院。同部に2.5cmの弾性軟の腫瘤を認める。血液検査、Ga スキャンに異常所見無し。生検を施行し病理診断はlinph adenitisであったが、8ヶ月後、左耳介下部と後部のリンパ節腫脹を触知し再度生検を行う。顕微的にリンパ節の芽中心の拡張と数の増多が見られ、Ferry (1992年) らのFlorid Progressive Transformation of Germinal Center と診断した。

26. 口蓋に生じた壊死性唾液腺化生の1例

磯田 淳, 三木裕香子, 広田実可子
石部元郎, 福与晋之, 小田泰之
金子 治, 工藤逸郎 (日大)

今回われわれは壊死性唾液腺化生の1例を経験し、文献的考察を加えて報告した。(症例) 患者: 76歳, 男性。初診・平成10年2月10日。主訴: 上顎粘膜部の腫脹。現症: 口蓋正中中部硬口蓋から軟口蓋に小豆大、境界不明瞭な腫瘤を認め、その中央部には5×5mm大の潰瘍がみられた。処置および経過: 生検にて、壊死性唾液腺化生との病理組織診断を得、義歯の調整をし、経過観察を行った。現在初診より8ヶ月経過、異常は認められない。